
Side-Eastrn-Dream

有檻侍裏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

S i d e－E a s t r n－D r e a m

【Nコード】

N 6 8 8 4 Q

【作者名】

有檻侍裏

【あらすじ】

東の最果てからとある目的を持った少女たちは大陸中を席卷する組織へと踏み込む。そこで待ち受けていたのは古い思い出と新たな出会いの洗礼だった。世界を巻き込む機械犯罪組織、陰謀と策略に満ちた闇ともいうべき裏側に、少女たちはなにを見るのか。異世界冒険ファンタジー。ここに登場。

Side—prologue

煌々と頭上から熱が降り注ぐ文句なしの晴天。

その熱気を全身で浴びる土色のマントを羽織った二つの影。

舗装された石畳の上を一人は渋々と足を動かし一つは軽快に足音を鳴らす。

黒を基調とした革製のジャケットと腰に吊った二丁の銀銃。ホルスターに収まったままの状態からでもかなり使いこまれた品だとわかるグリップの摺れ具合。

それを持っているのは十代後半だろうと思われる少女。無骨なデザインのは少女が持つには少し重い気がするが彼女はごく自然にそれを提げている。

表情は憂鬱そのもので、時折思いついたかのように吐く溜息が一層あまり近づきたくない空気を醸し出していた。

一方の一つは端正な美人であった。

その背に背負っているのは長大な大剣。柄と刃の背を包むように広がった機械パーツが付いた武器の名称は“トリガーブレイド”。

もはや骨董品に近い価値が付いている代物だが今なお現役のまま使われているようだ。

「ご主人、もうすぐ街に着くというのにどうして溜息をつくのですか？」

美人が流暢に言葉を話す。

「……アニアわかっているだろう。私はあそこが苦手なんだ」

一方はしみじみと呟いた。さらに濃くなった陰鬱な雰囲気のアニアと呼ばれた美人にまで移りそうなほどに。

「そうですか？ ワタシはすごく居心地がいいのですが」

「やっぱりアニアはわかってないな。あそこは一般人がおいそれと行く所じゃないんだよ」

やれやれと少女は嘆息する。アニアはそれに端正な顔を少し歪めて反論する。

「そうでしょうね――たかが子供のご主人様の行くところではないでしょうからね」

「あ？ 今何だった？」

それがいとも容易く彼女を刺激した。地面の石畳の数をちまちま数えていた彼女の顔はぐりん、とアニアのほうへ向けられ穴が開くのではないかというほど睨みつける。

「あれーどうかしましたかー？ まさか、『たかが子供』だなんて言われただけでプツンしてしまうような『お子様』ではありせんよねー？」

「鉄クズか？ 今すぐ鉄クズになりたいのかアニアは？」

「残念ですが私の体は鉄では出来ていませんので鉄クズにはなれないんですよー残念ですねー」

「じゃあジャンクだ。即バラしてやつから覚悟しろよ！」

ジャキンツと小気味のいい音を立ててホルスターから二丁の銀銃を抜き放つ。

銃口をアニアへと突き付け動けば撃つとでも言うように狙いを定めた。

「うおっほん！」

そんなところに頭上から大きな咳ばらいが聞こえた。
見上げれば既にそこは街の入り口に存在する関所と門番の姿。

「身分証明の提示をお願いしますか？」

「……あ」

我に返ったように間拔けな声を出したのは二人同時だった。

※ ※ ※

「あー恥かいたっ！ 屈辱だあんなのは！」

「ご主人の自業自得ではないでしょうか？ ちなみに私は関係ありませんので」

街中であるにも関わらず二人の口論は激しさをばかりであった。
しかし、この街中においてそれを気にするものはあまりいない。

人々の往来が最も激しい街であるここ、スタックランドは交流都市と呼ばれる大きな都市のひとつである。

海に面した西部からは貿易船や客船の船着き場が点在し、北側には機械人形を作る機械技師達と武器商人が住む居住区。
ガジェットトリール

東は赤茶けた大地が広がる砂漠地帯であるが、南に存在する石畳
クリスタルロードで作られた鉱石道路のおかげで交通の便もいい。

そしてなにより人々がここに集う理由はこの街の中心にある。

活気のある中央通りを抜けた先にそれはあった。

大きな時計が時を刻む時計塔。城のような外観の外にある特殊鉱石で彩られた透明感のある門扉。

街一番の大きさを誇る建造物はGDMG u a f M i n e rが持つ本部——アイオーン

クロック（通称A，C）である。

「さすがに本部ともなると大きいんですねご主人」

「……ああでかいな。無駄に」

大陸を席卷する機械を用いた犯罪から守るために作られたGDMであるが、この少女にとっては本部の豪華さなど二の次である。

一番の問題はこの組織が使えるかどうかそれだけ。アニアが目を輝かせて建物を見つめている間も少女は真剣な表情を崩すことはなかった。

GDMは増発する機械犯罪を取り締まるために発足された組織の一つである。

主な仕事は機械を用いた犯罪に対抗、取り締まりをする一方で、民間からの依頼を受けるなど人々の生活に根差した柔軟な対応が取られている。

それ故に、GDMに属している人間は一定の権力を持たされている。

犯罪者に対しての武力行使、一定地区の封鎖、そして民間人からの依頼の受諾。

ただし、それを鼻にかけて悪用する職員が存在することも紛れもない事実である。

「おい、そこのお前ら」

A，Cのエントランスを見渡していた二人に、背後からそんな声が掛けられた。

声の主は彼女等と同じく二人組。刃の短い幅のある短剣に細く長い刺突剣を持つ西洋風の服装をした若い男。
レイピア

もう一つは機械人形と呼ばれる戦闘用人型機械の女性型。
ガジェットドール

甲冑を身につけ優に二倍はありそうな突撃槍ランスを背負ったナイトシリーズが主人である若い男に半歩ほど下がった位置で待機している。

「どこの田舎ものかは知らないが入り口でボーッと突っ立っているな。僕の邪魔だ」

それが当たり前というようにGDMのメンバーであることを示すペンダントを光らせ少女を見下す。

微かに不快感を覚えたものの、表情には出さず丁寧に一礼して下がる。

「ああそれは済まなかった。なんせ東の最果てから来たもので」

「荒野の住人か。それがここに何の用だ」

「依頼に来たんだ。人探しの依頼にね」

荒野の住人と言うのは蔑称だ。というのも大陸の中心といえる大きな街には普通、GDMの支所というものがあるのに対し、東側の地域にはよくて町、大半は村というべき規模でしか人が存在していないからだ。

つまりは田舎……地方という意味で都市部の人間は東の住民を快く思っていない節があるのだ。

「……ふん、せいぜい依頼者でも探すんだな。最も、ちっぽけな金額で受けてくれるお人よしなんていないだろうがな」

「お気遣いどうも」

それで満足したのか、彼は一瞥して視線を逸らすと、戦闘用人型

機械を伴って壁際に設置された昇降口に行ってしまった。

「ご主人」

「なんだ」

「ワタシ、あの人大嫌いです」

「奇遇だな、私もそう思うよ」

にやりと獰猛な虎のような、凄みのある笑みを浮かべて少女は言う。

「後でたつぷりと教えてやろう。どっちの方が立場が上か、をね」

※ ※ ※

「こんにちは。本日の用件はどういったもので？」

A，C内部の民間依頼所というエリアについた二人は、受付の窓口立つ女性に形式的な挨拶をされた。

燃えるような真紅の長い髪に、白いワイシャツ黒のベスト、オレンジのネクタイをした小洒落た格好。

薄暗い雰囲気のパーカーウンターでシェイカーでも振っていても不思議ではないその装いは、他の職員と比べても特異なものである。

「あ、ああ……ちょっとした依頼に、ね」

「そうですか——ではこちらへどうぞ」

言葉少なに示された場所はとも見ても普通の民間人が入ってはいけない部屋だった。

訝しむような視線を投げかけてもただニコニコとした微笑を返されるのみで、二人は不承不承としながら促されるまま部屋へと招き入れられたのだった。

「さて、と。ここならふつうの職員は入ってこれないランクS級の部屋ですどうぞお寛ぎなさってくださいな」

「――は？」

「ああさっきの彼とのやり取り、しっかりと見させていただきました。すみませんねー下っ端のひよっこ君が失礼なことをいたしました」

「だから」

「こちらとしては“GDM設立の立役者”とも言うべきお方に誤解の無いように、と思ひましてね」

「――っ！」

埒が明かない。

そう思っていた矢先に強烈な衝撃を伴った一撃が放たれた。

驚愕に目を見開いた少女をにやにやと見つめる彼女は、人を食ったような顔立ちでどうにも嫌な気分を

“思わせている”。もしかしたら――いや、既にこちらの『正体』などすべて知った上でこういう態度を取っているのだと悟らざるを得なかった。

「それは――まあここでは一応置いておきましょうか。それより依

頼の話をお聞きいたしましょう」

「……狸め」

忌々しい、苦虫を噛み潰し尽したといったいい表情を浮かべて少女は目の前の女性を睨みつける。それでどうなることもないと知っていたながらそうする以外に思い付かなかったからだ。

「ああそれは間違いですよお嬢様」

それにやはりくつくつと笑いを堪えながら話す。

「私は狐です。リミエ・フォックスが私の名前ですから」

それを聞いて今度こそ少女は溜息をついた。

幸せが逃げますよ、という戯言が右から左へと流れていったことがせめてもの幸이었다。

※ ※ ※

A, Cのある中央通りから北へ行けば筋骨逞しい格闘家の様な商人が、怒鳴り散らしながら呼び込みを行っているのには些か驚いた。

あれでは客が怯えて逃げてしまうのでは、と思ったが実際はそうでもないらしい。

彼らが相手をしているのはどれも戦装備をした男達であり、少女達のような軽装に身を包んだ者たちはほとんど見かけなかった。

中央通りとは違った種類の熱気が辺り一帯に広がっている。それ

は實際至る所から伸びる煙突の煙と熱のせいでもあり、客と店主がぶつけ合う言葉同士の応酬のせいでもあるようだ。

「おい親父、この剣もうちょっと負かんねえか？」

傷が所々についた場馴れした傭兵の男が店主を呼ぶ。目的はどうやら店の前に置かれた“特価品大セール”と書かれた樽に入っている長剣らしい。
ロングソード

「バカ言うんじゃない！こりゃ良質な鉱石で造った自慢の品だ！」店主が無造作にその樽から一本の長剣を取り出した。磨き上げられた刃は陽光に照らされて怪しく光を反射させる。

「おいおい、そんなのがごろごろ軒先にいっぱいあるじゃねえかつ」
ツィハンドソード
傭兵の男が別の樽から両手大剣を引っかく。その剣にも“特別価格”と張られたタグが見える。

「そりゃ全部良質な剣ってこった！」

両者が示し合わせたように豪快な笑い声を上げる。余りにも適当なその光景は、しかしこの区域の少なくとも半数はこういう形で商売を行っているらしい。

慣れた手つきで乱暴に金銭のやり取りをし、無造作に武具を持っていく。あるいは鞘をその腰に掛けて、あるいは街なかを自慢するかのように抜き身の剣を振りながら。

「ご主人。ワタシはあの方に騙されたような気がしてきました」
「奇遇だな。私もそう思うよ」

その一報は彼にとって非常に不吉な始まりを予感させるものだった。

『——というわけでそちらの方に御客人が向かったはずだから、くれぐれも失礼の無いように失礼してくれると嬉しいなー』

大体にして彼女からくる一方的な丸投げの頼みというのは非常にデリケートなものばかりだ。^{扱いつらい}せめてもの救いと言えば彼女は自分以外にこういうことをしないという点だろうか（そもそも褒められるような行動ではないが）。

今回の頼みにしたってそうだ。

よりにもよって今回の頼みは簡単に言えば『子どものお守』だ。まあ自分だって子どもと言えど子どもの様なものだが経験や場数と言う点においては玄人染みているのも事実だ。

それに、彼女には借りがある。どうしたって今の自分にはどうすることも出来ないのだから始末に負えない。

「わかったよ。ただ、こっちで色々適当やらせてもらうからな」

それは彼が取れる精一杯の抵抗だ。通信機器の向こう側では噛み殺したような声で笑っている細い眼つきの彼女の姿が鮮明に思い起こせた。

『じゃあ頼んだよヴィー』

「頼まれたよりミエ」

それは長い間二人の間で使われている合図だ。

リミエ・フォックスとヴィレル・ルートリガーの二人はGDMの中でもある種の特別に分類される。その中でもさらに特異な分類に二人は図らずともなっていたのだった。

通信が切られた機器をしばらく眺めて、ヴィレルはふと目の前に置かれた湯気の立つカップに気付いた。

「サービスですよ」

奥のカウンターからにこやかにほほ笑む初老の男性が傍らに立つ少女に給仕させたものらしい。

鋼鉄喫茶
ステイールカフェは北側にある唯一の静かな場所だ。

武器商店と工房が立ち並ぶこの区域において喧騒は必ず付きまとう。根が豪胆な者たちばかりの中で、心地いいクラシック音楽が聴ける場所があるのは奇跡の様なものだ。

「またリミエのお願わがままいですか？」

「いや、今回はある意味依頼だよ」

似たようなものだけだね、と苦笑を交えつつヴィレルは置かれているカップに手を付けた。

「……、うん。いつも美味しいよマスター」

「それはよかったです」

表情を崩さないまま両者は言葉を交わす。

そのまま緩やかな時間が流れる。壁に掛けられた時計が規則的に針を動かし、時折思いついたかのようにカップに口を付ける。

——スティールクフェ全体が揺らぐ振動が発生したのはその時だった。

幸いにも店内で器物などの落下もなく、怪我人も出てはいない。

地面に大きな物が落下したような振動の仕方だったため、どこかの商店がなにかを爆発させたのかもしれない。

この地域に存在するGDMのメンバーの中でも現場に一番近いのはきっと自分だろう。厄介事は頼んでもいないのにやってくるのだから始末に負えない。

ヴィレルは代金をテーブルに置くと、マスターに手を軽く振りながら外に繰り出す。

憂鬱な気分でも天気は相変わらず晴れのまま、周りの店も先ほどの振動で慌てていたところもあったが概ね異常はないようだ。

空を見れば細く長い黒煙が立ち上っているところがあった。おそらくそこが震源地なのだろう。

場所は北側入り口に程近い辺り。ヴィレルは知らなかったがリミ

エが頼んだ御客人もちょうどそこにいる。

そして彼女達はその騒動の中心に居るのだった。

※ ※ ※

ウェボンストリート
武具街路の小さな広場である工房が試作品の大型機械傍迷惑なものを作動させたのと同じ、少女達も偶然そこに居合わせた。

全長およそ5メートル、円盤状の頭部にたこの足が付いたような外見。

頭部は単一の対象認識レンズに可動式のガトリング砲が二丁付いた簡単なものだが、多脚装甲での移動の早さと頭部が回転する仕組みのおかげで予想よりも俊敏な動きと自由度の高い体制を取ることができるらしい。

その大型機械は現在ブレイクダンスの真っ最中だった。

「……無駄な方向に技術が発達してるんだな」

頭部をコマのようにしてぐるぐると回転。もちろん脚部はそれぞれ自由に動き回り人の目を惹きつけながら時折ポーズを取るようにピシリッと停止（頭部は回転したままだ）。

この機械を作った人物と言うのはきつと相当に頭のネジがぶっ飛んでるに違いない。

大道芸をする機械……しかも大型で造るという発想はまず浮かばないだろう。

子供のように目を輝かせているアニアを横眼で見ながら少女はこれを造った人物に興味が沸いていた。

異変が起こったのはそんな時だった。

ブレイクダンスを終えたマシナリー大型機械が体制を立て直す時、頭部に広場にあった噴水の水が勢いよく掛ってしまった。

その時、微かに紫電が走ったのを少女と何人かだけが目撃していた。

対象認識レンズの稼働を示す緑の発光体が突如明滅し、やがて沈黙。動作を完全に停止したマシナリー

がその数秒後、鮮やかな赤を発現させながら発光体を輝かせて上空にガトリング砲の銃口を向け、発砲した。

マシナリーが制御を失い、暴走状態となったのだ。

それに気付いた見物人は、吹き散らした綿毛のごとく広場から恐慌状態で逃げ出すこととなる。

「アニア！」

「了解です！」

少女の掛け声アニアが反応したと同時に、マシナリーは銃口を逃げ惑う民衆に向けた。

「させません！」

その銃口から民衆を守るようにアニアは背負っていたトリガーブレイドを抜き、幅広の刀身で襲い来る銃弾の嵐を防いだ。

刀身にぶつかる銃弾の甲高い音と硝煙を立ち上らせながら空の薬莖を排出させるマシナリー。

民衆はその間に全員逃げおおせたようだ。この場に残るのはアニアと少女、暴走したマシナリーののみ。

四本あるうちの一本の脚部装甲を垂直に上げ、地面に強く叩きつけたそれを切っ掛けに、両者の戦闘は本格的に開始された。

※ ※ ※

ヴィレルが広場方面から逃げる一人の男と目が合った時、不自然なまでのその様子に思わず声をかけたのは果たして幸運だったのか。

「おい、そのあんた」

「は、はひいっ！！」

なぜこうも罪悪感に駆られるのか、すこしばかり考えたかった気もしたがひとまず思い直しその場で直立不動の体制を取った男にヴィレルは歩み寄った。

「この辺で何か大きな騒ぎが起きてるみたいだが、何か知らないか？」

「ひえっ！？　　そ、それはあの……」

悲鳴を漏らしてから尻すぼみに小さくなる声のせいで何を言っているかは聞き取れなかった。

だが、作業着を着たこの男が騒ぎに関わっていると踏んだヴィレルは、自分が持つ最大限に効果を発揮するとあるものを使うことにした。

懐から軽い調子で取り出したのは黒革のケース。

丸型の盾とその中に横顔の少女が金の装飾で描かれたそれはGDのメンバーであることを示すモノ。

左右に開けば眠そうな表情をしたヴィレルとそっくりな、こちらは少しだけ真面目そうな顔つきの同一人物の写真。

「！ ガーディアン！？」

「そういうこと。――で、ちょいと事情を話してもらえませんか？」

口元を少し緩めて余裕の微笑に男は顔色を青褪めさせるのに忙しいようだった。

※ ※ ※

『さ、最初は少しだけ借りるつもりだったんだ！ そりゃ多少は弄ったりもしたけど、ちゃんと元に戻して返そうとしたんだ』

人が少なくなった武具街路をヴィレルはたった一人で走り抜ける。先ほどの男にはもう一度しっかりと話を聞かなければならないため、安全な位置まで誘導した後手錠で身動きを取れなくしておいた。

『その前にちょっとだけ、ほんのすこしお小遣いでもと思って広場に持ってたんだ』

この辺りの避難勧告と安全確保のための人員を寄越すようにとの連絡は済ませた。後のことはそいつらに任せればいい。

『最初は何ともなかったさ。けど、一度あれがバランスを崩したら、あっという間におかしくなっちまって、仕舞には人を狙い始めて…』

今の装備を確認する。指先から腕まで覆う特殊鉱石製の籠手を右手に、左腰には短い銀色の棒状のモノ。

『その時二人組の女がぶっとい剣で凌いでみんななんとか逃げられたんだ』

正直装備は心許ないがこれでもなんとかいけるはずだ。少なくとも、丸腰で敵地を掻い潜って来れた経験のあるヴィレルだからこそ。

『その後の二人組い？ 知るわけないだろう。今頃あのマシナリーに踏みつぶされているんじゃないか？』

手遅れにならないよう、とつくに逃げているようにとそう祈りながらヴィレルは街中を疾駆する。

「まったく、今日は厄日なんじゃないか？」

最悪の想像を思い浮かべながら広場手前まで辿りつく。足は止まらないまま、物音一つしない静寂の広場で彼が見た光景は、そのどれもが見事に外れていたのであった。

赤く光る対象認識レンズがアニアを捉えようとした瞬間、彼女は自身の持つ武器の引き金を引いた。

鈍い稼動音が小さく鳴り響き、そのトリガーブレードが噴出孔から圧縮した空気を放出して推進力を得る。弾かれるようにしてアニアは武器ごとロケットのように前へと進む。

狙いは脚部装甲の一本の繋ぎ目、関節部を叩くこと。もちろん簡単にそれが出来るとは思っていない。だが、マシンナリーが取った行動は予想の範疇に無かった。

脚部装甲の一本をまるでトカゲの尻尾のように自ら切り離す。そこから鞘に収められていたナイフが銀光を伴って姿を現したのだ。

数瞬の内に武器を一つ増やしたマシンナリーのナイフがアニアの持つ武器と交差する。推進力を得ているはずのトリガーブレードであっても、大きさのまるで違うナイフから比べれば玩具に見えてしまうほど。

「小賢しい真似を……」

火花を散らして鏢迫り合いをしているアニアを引き剥がすため、マシンナリーがガトリングの一門をターゲットに向ける。しかし、レンズのセンサーが一つの人影を察知した。

ガトリングに向けて放たれる群青の弾丸が二発。着弾と同時に冷気を纏い氷柱を作り上げガトリングの一門を使用不能に陥らせた。

放った人物はもう一人の少女。両手に銃口の無い奇妙な形の銃を構え、鋭い目つきでマシナリーの動向を探る。その間にアニアは一時離脱、噴出孔の向きをスライドさせて少女の隣まで下がった。

「ますます厄介な代物だなあれは」

「あのナイフですが……少々特殊な素材で出来ているようです。ほら、傷一つ付いてない」

ナイフが放つ銀光には些かの乱れもない。片刃のダガーに似てはいるが、それもマシナリーサイズとなると両手大剣ツィハンドソードよりも遥かに大きい。

単純に人間が持てる大きさを越えているため、常人ならばとても容易く吹き飛ばされている。

それを、アニアは力を拮抗させていた。もちろん彼女自体の筋力はそれほど優れているわけでもない。

単にあのトリガーブレイドの性能が常軌を逸しているのだ。ただ、あれを扱えるのは今のところアニア以外に少女は知らないが。

「ご主人、先ほどの弾丸バレットの残数は？」

「ゼロだよ。あれは……そもそも使う予定はなかったし……ね！」

流暢に言葉を交わしているものの、マシナリーが残った一門のガトリングを乱射してくるため長くは話せない。

二人の間を割くように狙い澄まされた銃弾が襲う。円形状の広場の中心に噴水以外の遮蔽物が無いため、常に移動し続ける他に回避の手段がないのだ。

ただ、マシナリーの方にもガトリングで消費される銃弾に限りがある。大体五秒ほどの連射をしたあと、およそ二秒のラグがあるのだ。その二秒の間に銃弾が装填されているはず。

マシナリーの構造自体を考えれば単純に弾切れ待った方がいいかもしれない。だが、いつまでこのマシナリーが別のモノに興味が行くかわからない。

（これを造ったのがもしも私なら……）

この機械の行動を見るにこれは対人間用として造られている。兵装は少し足りないが、思うに製作段階なのだろう。

そして大抵のこういう対人間用兵器の多くは、より多くの人を破壊することを目的とするのだ。

そのため、一定時間内にターゲットが何らかの理由で倒れない場合——別の破壊対象を探しに行くようプログラムする。

短期決着を図る以外にない。そう判断した少女は銃弾の嵐がやんだ瞬間、突然その場で停止した。

「やらなきややられるっていうのなら——ちやつちやつと鉄クズにし
てやるよっ——！」

土色のマントを両手で広げる。露わになった肢体に絡みつくよう

に黒のベルトの帯が四本。一つのベルトにつき五つのボックス、合計二十の銀色が陽光を受けて鈍く輝いた。

右肩から左腰に掛けてあるベルトの帯から二番目のボックスに少女が触れる、と底部ごと外れたボックスの中身が垣間見える。

それはU字型に溝がほられた二本の棒形状のパーツ。続けて左肩から右腰にかかるベルトの帯から同じく二番目、対になっている同形状のパーツが飛び出した。

しかし、装填の終わったマシンガンが再び唸りを上げた。だが、それは少女の前に立ちはだかったアニアの手によって阻まれる。

悲鳴にも似た甲高い音の連続。それが聞こえていないかのように少女は作業を続ける。

パーツを銃器の先端上下に取りつけた。銃口をリードするかのよう^{フリッツバレット}に組まれたパーツは、小さなバチリツという音を鳴らし、紫電を激しく散らしだす。

「取って置きの雷撃弾だ、機械なんざ一溜まりもねえよ」

ホントは使いたくなかったけどな、と一人呟いてから銃口をマシンナリーの制御部があると予測した位置に向ける。

位置としては丁度対象認識レンズがある辺り、相も変わらずギラギラとした赤い光を振りまく目。

「データの破損は止む無し、と」

そもそも開発者から話を聞いた方が早そうですね、と納得し、銃撃の嵐が止むと即座に引き金を引いてその場から飛び退いた。

「ファイア発射」

短く発せられた声を引き金^{トリガー}として、放たれたのは紫電の尾を靡かせながら突き進む雷瞬の銃弾が二線。

空気を破裂させながらレンズを寸分の狂いなく貫いたそれは、鈴の音に近い音を残して跡形もなく消え去ったのだった。

※ ※ ※

煙が立ち上る火種が散らばる広場でヴィレルが見たものは、残骸を漁る、二人組の姿だった。

「あれー？ ないな。普通、こういうマシナリーには製作者の名前を刻印してるはずだけど……」

「そのパーツを吹き飛ばしてしまったのでしょうか？」

ぶつぶつと呟く二人組を乱れた息を整えつつ、呆れた眼差しを向けるヴィレル。

「……何をしている。ここは既に避難勧告が出ているはずだ」

怪しい行動をしていた二人組が、ぎくり、という風に身体を強張らせる。そのままグクシャクとした動きでヴィレルの方に向き直った。

そして、どこか見覚えのあるその顔立ちに気付き、ヴィレルが懷から携帯端末を取り出した。

手元のキーを軽やかに操作。先ほどリミエから受け取った御客人のデータを見る。

関所で提示された身分証明のデータを基に、出身地から犯罪の履歴なども照合されるその人物データが示す名前に、驚きを表しつつも少女に尋ねる。

「ここでマシナリーが暴れているとの情報を聞いている。そして、二人の民間人が残っているとも……それは、あんたらか？」

「あ、ああそうだけど？」

ということは少女達が漁っていた一際大きな残骸がそのマシナリーなのだろう。どうやってあんなったとかはわからないが、たったの二人であれを壊したというのは純粹にすごいと思う。

「俺はGDM本部所属第特S級隊長リミエ・フォックスの直属の下、ヴィレル・ルートリガーというものだ。まああんたらはあのリミエに会っているだろう」

「あいつそんな凄いやつだったのか……」

「人は見かけによらないのですねご主人」

色々失礼なことを言っているものの、ヴィレルは否定する気は無かった。

「ああ、そうだ。せっかく名乗られたのだから、こっちも名乗るか」

被ったままのフードを取り去り露わになったのは、浅緑の長髪に勝気な水色の瞳。幼さが残る体軀に見られた五つの黒帯が違和感を持っているものの、それを差し引いても美人の部類に入るだろう。

「私の名前はフォルティ。フォルティ・レイニードール——よろしくな、ヴィレル」

鈍色真紅

レイニードール開発社。

現存する人型機械のモデルを数多く造り上げた大企業であり、GDMの直接的なスポンサーである。

当主はカバルネ・レイニードール。学者然とした白髪の方で、機械技術の発展の基礎となった特殊な鉱石を数多く発見したのは特に有名な話として知らない者はほとんどいない。

彼はそれだけに留まらず、極めて人間に近い人型機械の開発に成功。その精巧さから疑似人形マジックドールと呼ばれた全十体を造り上げたのだ。

かくして彼の名は今の時代で最も素晴らしい人間として歴史に刻まれることとなったのだ。

「――なんて、言われちゃいるけど実際は子供に激甘の親バカでしただけのが本当の話」

これ内緒な、と淡々と述べてからフォルティは注文した特大イチゴパフェの攻略に取りかかった。

ステイールカフェの常連専用のスペース（遮音性に優れる透明なガラスで覆われた部屋）にヴィレルが二人を連れ込んだ途端、仏頂面だったフォルティに急激な変化が生じた。

詳しく説明すれば店員に差し込まれたメニューの一部を凝視し、

それと交互に見比べるようにしてヴィレルの顔を覗きこんだのがそもその始まり、運ばれてきた特大のデザートを満開の笑顔で迎え、始まりの話に繋がったのだ。

「お前の親父の親バカぶりはわかったから、さっさと用件を話してくれると嬉しいんだが……」

「あ、すみません私もこのイチゴタルトをください」

「人の話聞けよ」

ちらりと様子を窺ったアニアはなにを真剣に悩んでいるのかと思えば、今までずっとメニューを選んでいたらしい。まったくもって腹立たしいことこの上ない。

ただ二人の食事を見ているだけでは埒が明かないと判断したヴィレルはそもその原因であるリミエに連絡を取ることに思い至った。

懐から携帯端末を取りだし電源を入れる。半透明の映像データが空中に浮かびあがり表示された文字列の文末に点滅を繰り返すアンダーラインが入力を待っている。

「リミエ・フォックスに表示通信」

音声を認識した端末が再び文字列を発生させ、それから十秒ほど後に画面上にリミエの姿が浮かび上がった。

『おや？ ヴィーの方から連絡が来たってことは依頼人にちゃんと会えたんだね？』

「おかげ様でな」

『それと大きなマシナリーが暴れたっていう報告も来ていたね……現場に着いたガーディアン連中が驚いていたよ』

あれも君だろうか？ と投げかけられた質問にヴィレルは僅かに首を振る。

「あれはここにいるその依頼人がやったもんだよ」

「そうそう、その如何にもボンクラそうな人間にそんなこと出来ないって」

人を小馬鹿にした態度を隠しもせずフォルティは画面上のリミエと相対した。

『へえ、ただの御嬢さんではないと思ってはいたけど……それなりに使えるんだねえ——それなりには』

「お褒めにあずかり光栄です——なんて台詞が出るとでも？」

『思っていないがね』

両者は互いに薄く笑みを浮かべているものの、間違いなくバチバチと二人の間に火花が散っていることだろう。

一人は他人を弄くり倒すのが何よりも好きだと話し、もう一人はおそらく他人の鼻っ柱プライドをへし折ることを楽しみとしている。
この程度ではリミエのプライドに掠りもしないだろうが。

それに、リミエはかなり人が悪い上に狡猾である。手札を常に用意しておいていくつも策を巡らせている。だから、ここでリミエにカードを切らせてしまった時点でフォルティの負けは決まっていたものだった。

『そうそう、忘れる前に一つその依頼人さんに用事があるんだよ』
「私にはない」

まあそう言わずに、と呟いてリミエは端末を操作して個別に映像データを発生させる。待機を示す時間は無かったためすでに稼働状態イデにして置いたのだろうそれに、学者然とした男の顔が表示いっぱいに映し出された。

それを見た瞬間、フォルティの表情が歪むと同時に――

『フォルティー！！ ああフォルティフォルティ、旅の間に怪我はしていないかい？ 毎日しっかり三食食べていたかい？ 一週間前に会ってから一度も連絡をくれないから心配で心配』

ぷつん、と映像データを強制終了させたフォルティはわなわなと震えていた。

『おやおや、話も聞かずに通信を切るなんていささか彼が不憫じゃないのかい？』

「リミエ！」

店内に響くほどの音量を上げたフォルティを見て、防音設備が整っているこの個室を選んだのはやはり正解だったとヴィレルは思う。

もはや会話に入る気力もなく、ふと目の前のアニアを見れば彼女はいつの間にか、運ばれていたイチゴタルトに舌鼓を打っていたのだった。

※ ※ ※

大きなノイズと共に断ち切られた通信をみて、レイニードール社代表のカバルネは悲壮感に溢れていた。

『……うん、親の心子知らずというのは本当なんだろうね。僕はそれをしみじみと思うよ、うん』

「まあ顔中ぐしゃぐしゃにした人が画面いっぱいにあったら、切りたくもなるのはわかります」

場所はリミエが普段使っている作業用の執務室。雑多な書類がいくつもの塔を形作る隙間に映像データが一つ存在していた。

既に彼女への用事は済ませているし、ヴィレルからの連絡も取りあえずは聞いたことだからよしとする。

『しかし……我が娘ながら短気に育ったものだよ。疑似人形の一体が盗まれてから三日でそこまで行ってしまうとは……うん』

それはそもその原因たる案件。

レイニードールが誇る最大級の偉業を何者とも知れない誰かに盗みとられたという事実。

もちろんこのことは世間一般には知らせていない。余計な混乱を招いても解決に至ることは有り得ないからだ。

「お嬢様のことはお任せください。私が最も頼れる人材に一任致しましたので」

それでも伝えるべき人間には知らせる必要がある。彼女は信頼するに当たる人物で、有効な解決手段を持ち得るかも知れない。

『まあそこはリミエ君に任せた方がよさそうだし、本当は僕がそばに付いて上げたいのだけれど……』

画面越しでも伝わる子を思う気持ちがリミエにですら重く感じる。フォルティが話す通り彼は過保護なのかもしれない。

『ああ僕のフォルティが居なくなって一週間——早く思いっきり抱きしめてあげたいよう、うん』

過剰なほどの愛情を滲ませる彼に辟易してリミエはそっと端末を閉じたのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6884q/>

Side-Eastrn-Dream

2011年10月8日02時17分発行